

これからの自由主義

東京大学教授 佐々木 毅

大谷学会からお招きいただきまして、大変ありがとうございます。どういふことについてお話ししようかと、色々考えたのですが、この数年間の世界的な非常に大きな変化を受けて、自由主義をあるいは歴史的に、あるいは思想的に、あるいは政治的に、色々な角度から考えておくという必要が非常に出てきたんじゃないかというのが、今日の話の発点にあった私の発想でありまして、それは、恐らく多くの方々の共有されるところではないかと思います。

政治経済の仕組みとしての自由主義を考えた場合に、これまでの自由主義というのは、基本的に何か他の主義と対決しながら、自分を築いていこうとしてきたこと、これが十九世紀から二十世紀にかけての歴史であったと思います。

自由主義を、他の何とか主義というものと対決させながら、それを主張してゆくというやり方は、ある意味で自由主義にとって、まとまりを与えます。その意味で言えば、戦後の冷戦も同じような意味をもったと思います。

ところが、自由主義を、何かと対立するという形でなく、それ自身として、考えてみると言うことになりまして、これは非常な難物でありまして、どういふようにこれをつかまえたらいんだろうかということについて、我々は、非常な戸惑いを感じるわけです。私たちは、この数十年間、自由主義というのは、要するに、

社会主義とは違うものだということを何となく考えて来て、そして、国際政治で申しますと、自由主義体制というのは、社会主義に反対すれば、みんな自由主義のレッテルが貼られるという、自由主義の大安売りみたいな時代を過ごしてきました。しかし、今や自由主義と対抗するようなイデオロギー、あるいは、体制というものが、ちょっとはつきりした形では、見えなくなったと言いうことになりますと、さて、自由主義というものは、何であるか、という原点に、我々は再び立ち戻らさせられるということにもなります。その中で、非常に興味がありますのは、今、ソ連とか、東ヨーロッパでやっている、いわゆる市場経済への移行、民主化という試みであります。

これは、なかなかうまくいきません。問題は、ただ時間がかかるのかという話ではないのであって、自由主義体制というのは、非常にやっかいな体制でありまして、要するに「自由主義体制とはこういうものですよ」と権力者がつくってあげるというようなことでは、とても自由主義とは呼べないという、基本的にそういう問題があります。つまり、自分たちで作って、発見して工夫しながらやっていくという以外に、自由主義体制というものは、少なくとも、社会や政治の仕組みとしては確立し得ないからであります。ですから、自由主義体制は、その意味において、方法におけるコンセンサスと、自発的な協力というものを要求いたしますから、そうしますと結局、特に大変革を一気に行なう、そして特に自由主義を一気につくる、ということとは、これ自体、いわば内部矛盾をはらんでいるんだと思います。

自由主義体制というのは、それ程、それぞれの社会が、手作りでもって作っていかなくてはいけないという宿命がありますから、

何か一つの公式にあてはめてやれる範囲というものは、相当に限られている。絵を書いて、白紙にそれを下ろせば、それで終りというのでは、これは、到底自由主義とは申せないものでありまして、結局、我が国に於きましても、戦後ずっと数十年にわたって、我々なりのやり方を、いわば、作ってきたという経緯があります。そういう意味で、自由主義体制というのは、いわば、成長していく体制という性格をもったものであります。

あるいは、もっと言いますと自由主義というのは、どこへ行くのかわからない所もある、軟らかい仕組みだということが、言えるだろうと思います。つまりそこに住んでいる人間の判断なり、行動なりによって、色々な所へ動かし得るというのが、その一つの大きな特徴でございますから、それが、どういう方角へ動くのかということとは、実は、歴史の中で、常に決めてゆく以外に手はない。あるいは、もっと言えば、決められた路線でしかないというんだったら、何が故に自由であり、そして自由主義体制であるのか分らないということになるわけであります。その意味で、実を申しますと、この自由主義の柔軟性、あるいはこの心もとなさとも申しましょうか、こういう問題を、どういうふうに我々は考えたいのかということとは、非常に決め手のない、かつ、やっかいな問題であります。しかし、このやっかいな問題が、これまであまり意識されなかったというのは、その半分以上が、社会主義というものがあつた、ということに依っているのではないだろうか、というふうに私は思います。これから、どういうふうになるか今のところわかりませんが、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間というのは、非常に不安定な時期でありました。これは基本的に、いわば、自由主義が、自前で、どういうふう

自らを律してゆくかということが、むき出しの形で、しかも、必ずしも好ましくない条件の下で、問われた時代であつたことと関係していたと考えます。そしてその結果、何が起つたかというと、自滅した自由主義体制も、少なからずあつたわけでありまして、それに対して、戦後の政治は、特に、いわゆる西側民主主義国の政治は、それまでの転換期の自由主義体制というものと比べますと、ある意味で、外枠が、がちつと決まっていた。或いは、日本なんかでは、若干違ったイメージがあるかも知れませんが、とにかく、一定の枠の中で、意見をまとめてゆくことが構造的にせまられていた、こういう仕掛けがあつたわけですから、色々な内部で対立があるとか何とか申ししても、極めてコンセンサスの度合の強かつた自由主義体制であつたと思います。特に、ヨーロッパでそうでありましたように、両陣営が、軍事的な対立状態が生じたために、自由主義というのは、軟らかくなく、むしろ非常に、硬い体制であるというイメージを内外に与えた。この数十年そのことが自由主義の内部的な平和なり、あるいは安定なりあるいは、さらに言えば豊かさなりというものを作ってきた、あるいは保障してきたという側面があると思います。その意味で、実は困り込まれた自由主義体制というべきものを、我々は、この数十年にわたって体験したということだと思ひます。

ところが、もうすでに、そういう困り込みの枠というものがゆるんできていますし、さらに、最近流行の日本異質論では、例えば、日本は、本当は自由主義体制ではないんじゃないかという議論も、外部からは、為されるようになりました。それを我々は、日米摩擦というふうに翻訳して、理解しているのですけれども、実は、それは、どんな自由主義体制を日本は作るのがかということ

を、問いかけていると理解すべきだと思います。ですから、それに対して「ノーと言える日本」とかですね、そういう反応も、氣持がわからんわけではありませぬけれども、余りに単純過ぎます。ましてやそういう議論を人種的偏見に結びつける受け止め方というのは基本的に、自分で自分のゆく手を塞いでしまふものだと思います。日米間の議論は「うらみ・つらみ」に関するものではなく、では、どういふ自由主義体制を作ったらいのかという大問題だということです。

日本は自由主義で、アメリカも自由主義で、仲良くしましょうという議論は、もう相当に、すでにすり切れている所があるのでありまして、言い方を変えれば恐らく、その自由主義というシンボルをひっぱなしてみた時、日本のこの仕組みというのは、自由主義であるかどうか、そうであるとするればこれは、どういふ変種なのかということを、私たちは自分で整理して、説明しなくてはいけないということであり、あるいは、それを場合によっては、自分たちの力で、変えなくてはいけない、あるいは何か新しい方向へ持ってゆかなくてはいけない、ということだと思っています。

その意味で、この自由主義というシンボルをひっぱなしてみると、その時にいったい日本というのは、何なのか。あるいは、政治学の言葉で申しますと、パブリックフィロソフィー、つまり、公の哲学に即して見た場合、日本はどういった方向を目指しているのか、何を目指しているのか、ということが問題になります。これは、自由主義とただだけでは、説明にならない。その中の、どういふものを日本はねらい、価値としてかかげていくのか、かつ、社会の仕組みを、それに向けてどのように配置しているか、あるいは、組織しているか、ということが問題になっているんだ

ろうと思います。

そういう観点に立った場合、日本についても私たちは、その辺の整理がどの程度できているのか、あるいは、何となくまだ無自覚のままで、日本の経済力が大きくなったという話とか、日本は、もう大国になったらしいというような漠然としたことを、議論しているようでは非常にあまい。あるいは、もっと言えば、自由主義体制というのは、何となくいいものだという思い込みで生きているのかも知れない。しかしなぜ自由主義は、しばしば足をすくわれたか、ということをごちゃごちゃと思ひ起こしていく必要があるんだらうと思います。古くから自由主義に対しては、本常に厳しい批判があびせられてまいりました。これらに共通な点は自由主義は道徳的にちよつといかがわしいんじゃないか、つまり非常に利己主義的で、自己利益を追求する体制ではないかと言うことであります。

したがって、こういういかがわしいことを、全部開放したらそこから出てくる結果というのは、非常に散々たる結果になるのではないか。それに対しては、いやいやそういうふうな、みんな利己主義を追求すると、「見えざる手」によって、実は、うまく調和が保たれることになるんだという反論がなされたわけです。しかし、「見えざる手」というのは、あまりにも心もとなない話でありまして、そんなものは、本当にあるんだらうかということも含めて、まあ魔法みたいなものですから、「見えざる手」による調和というのは、人間が利己主義的に行動することが、何か人間にとって、非常にいいことだと思わせるような、まことにけしからぬ主義ではないかという批判は続きました。社会主義者も、たぶん、ファシストもこれを共通に言ってきたわけです。つまり、自

由主義のそういう意味での倫理的なこの歯止めの無さが非常に、するどくつかれたと思いますね。

そして、だいたいその十九世紀の終りから、二十世紀の初頭にかけて、ぼんやりした、自由主義の時代というのがあったわけですが、そこで自由主義体制は古い、あるいはぱっとしない、のろい、老人臭い体制として急速に捨てられていきました。それに対して社会主義とか、ファシズムは、若者の味方、また俗っぽく言えば、かつこうがいいわけですね。それから、切れがいいわけですね。あるいは、アバンギャルドとしてパッと受け入れられた。それに比べて、自由主義というのは利己主義的、あるいは、俗物的、ちまちました、利己主義を象徴するものとして、イメージされたという所が、私はあると思います。従って自由主義は、人間の欲望をどういうふうにコントロールし、調和していくか、処理するのかという大問題をかかえ込んでいます。例えば最近非常におもしろいと感じますのは、自由主義は実は、自滅するんじゃないかという説があることです。これは、まさに、今私が申し述べたような形で、利己主義的な要素を暴走させて、以前だったら、社会主義とか何かがあるのだから、そこでぶつかるんだけれど、それが今は、歯止めがなくなっていることである。自己主張が歯止めがきかなくなっている多元主義的な、寛容な体制そのものを、いわば食いちぎってしまう、こういう恐れを指摘する人がいます。これは、確かに、杞憂といえは杞憂かもしれませんけれども、実はその自由主義体制というものを考える時に、その問題というのは、ずっと残り続けており、したがってこれを道徳教育でやるという考え方も昔からあるんですが、自由主義は道徳教育で解決しようとは、少なくとも思わないでしょう。そうし

ますと、いろんな政治的な仕掛けを作ったりして、エネルギーを流し込んだり、おさえ込んだり、つぶしたりしながらやっていくということが、非常に重要な問題になります。私の見るところこれからしばらく、自由主義としては、その合理性が問われます。自由主義というのは、自由であるので好きなことをし、日本流に言えば手段を選ばず好きなだけ金もうけをするというのが自由主義だ、従って、いいことだという、まことに気楽な発想がありましたが、これからはそういうわけには恐らくもはやいかなない。自由主義の合理性という言い方をするのがいかどうかわからないけれども、少なくとも、まず先程言った体制の現実の自覚化という問題が一つと、目的の合理性という問題が、直接自由主義に対して大きく、つきつけられることを我々は覚悟すべきだと思います。

その合理性というものの問い方には、それは色々あります。例えば環境の問題でもって、この問題を問おうという人がいます。〇〇の発散において圧倒的な比率を占めるのが、アメリカ合衆国でありますけれども、アメリカが環境問題について何にもやる気がないというようなことだとすれば、そこでアメリカ的自由主義なるものが実態として何なのかということが問われなければならないわけですが、それも一つです。

さらにもっとミクロで言えば、例えば、政治的な自己主張を認めるというの、自由主義の一つの基本原則でありますけれども、例えば、民族主義に火をつけるということであれば、自由主義というのですね、ある民族とある民族の、死に至る戦いみたいな話になりかねないでしょう。そうすると、それを一体どういうふうに収拾するのか考えなければなりません。また、経済面での

「共存」問題は自由主義にとって重い課題になりつつあることは改めて述べるまでもありません。いずれにしても、この自由主義の合理性ということについて、我々はこの数十年、実は、あんまり見ないふりをしてきたということが私はあると思います。それも冷戦のためです。已に、J・S・ミルなどに見られるように十九世紀におきましても、自由主義の合理性というのは問われていた。十九世紀ですと、これは例えば、個性の実現とか、あるいは文明の進歩だとか、いろんなこととの関係で、自由主義を位置付けようというふうに、人々は、悪戦苦闘したわけでありますが、我々一体どこに自由主義をつなぎ止めようとするんだろうかという問題はなくなっておりません。その意味で「自由主義が勝った、社会主義が負けた、ああ良かった、万才」という話は、過去にとらわれた発想以上のものをもたらずとは、思えないのです。いずれにしても、こういう合理性という問題を、頭の片隅みに、どのように置いてやっていくかということ、これこそ非常にシビアに問われなければならないのだと思います。

さらにそのことは、最終的には、我々自身というか、社会の文化的、思想的、社会的判断なりに関わってきます。それが結局、自由主義体制の質をいろんな形で、あるいは、その方向性を決めるわけであります。私が思うに、自由主義体制の最大の特徴は、自らがやってきたことを修正できる点にあります。これは、私は、基本的に重要な点だと思います。自分たちが、やってきた事を、変えることができるかどうか、変えるということが、ある意味で、人間個人の場合も、そうでありますけれども、自由というものの基本的な要素であります。社会もまた、自分たちの意思というものを、変えたり、再検討したり、自己修正をしたりする、能力

を持っているか、あるいは、持つような諸々のリソースといいますか、文化的、思想的なリソース、あるいは、制度的リソース、組織的リソースが、あるかどうかということが、当然、そこで問われるかと思えます。例えば合理性という話をいたしましたけれども、つまりこれは、何をしたらいいか、何をなすべきか、ということが、合理性の味に入っているんですけれども、どういふうに実現してゆくのか、実現してゆく為には、人間、人々を、人々の支持を集め、ある意味では、力を結集して、あるいは、政治権力を動員して実現するということも、必要である。合理性の追求ということにとっても自己修正能力のある社会としていくということが、まず最低の条件だということです。合理性との関係で、自らを修正して、あるいは、相互に修正し合う、そういう必要がでてくるわけですが、そのためには、自己修正のメカニズムを合理性についてのメッセージと同時に、どういうふうにつけていくかということが大切で、さもないればどんなにいいプランがあったとしても、これは絵に書いたもちで終わってしまう。従ってまず「どう実現するか」というメカニズムの機能が、目立つということになるでしょう。そういう意味で、これからの自由主義の課題は、一つはその合理性の問題、もう一つは、その実行力といえます。実現能力にあります。その実現能力を、我々、政治学者は、政治力の問題というふうに考えるわけですが、私は、この政治力が、どこでも非常に腐食し、かつ脆弱化してゆく、あるいは、脆弱化のプロセスが、しばらく続くのではないかというふうに思っております。なぜ、そうかと言いますと、現在の政治家なり、政党なり、今までの冷戦の中で、でぎ上がった、色々な組織の配列関係の中に、根を置いておりますから、それ以上の展

望を、元々持たない、あるいは、組織は、実際には、動かないという状態にあるからであります。

したがってこうした状態が進行すると、今世紀初頭に自由主義が年寄り臭くて、ぱっとしないで魅力がないと写ったのとやや似た状況がでてくるんじゃないかと思うわけです。その意味で申しますと、日本の場合も恐らく、例外ではないだろうと思います。われわれは既に、既存の政治のあり方の病氣みたいなものが、あちこちで出てくる、そういう予感を持っております。

政治にとって難問がもう一つあります。自由主義は、基本的に二十世紀においては、国境の内部の問題を扱ってきたわけです。国境の内部で、どういう社会が実現するのがすばらしいとか、すばらしくないとかです。それが今や国境の垣根が低くなりつつあるということがあるわけでして、これは自由主義、民主主義の場合にとって深刻な問題を生み出すことになります。自由主義というのは、一方で、普遍的だ、すべての人間は、自由で平等だ、というふうに考えますけれども、しかし実際は、それを動かしてゆくメカニズムというのは国の単位でもってやってきた。これが崩れてきつつあるということであるとすれば政治の枠組を普遍的、グローバルにしてゆけばいいのか、どこかで、その仕組みを変えなければいけないのかという、これもまた、ある意味では、合理性に関わる問題だと思う。これが自由主義にとって現実的には、無視できない課題としてでてくると思います。政治の仕組みを作るということは、この垣根のあり方やサイズの問題について、どう考えるのが合理的であるか、という問題が、これからますます多くなってくる。したがって、ヨーロッパのEC統合のように、ああいう形で広げてゆくということも一つの合理的な判断である

と考えられないこともないわけですが、それをやるということ自体が、大変な、政治的エネルギーを必要とする。あるいは、既存の政治と利益をめぐる、あるいは、権限をめぐるものもろの関係を再編成しなければできない。それは、口で言うのは、簡単ですけど、実際にどのように行うのか、というような問題ははつきりとでてくるであろう。政治の改革が言われるのは何もスキャンダルのためばかりではありません。

私は、日本もその中の一つでありますけれども、戦後型の自由主義体制については、更に議論をしなくてはいいけません。特にこれからの自由主義の仕組みというのは、今までの発想を引きずって考えていては、もはや、いろんな重要な点が、むしろ、おかいかくされてしまうのではないかと考えます。そして、その国の持っている、文化的、政治的、思想的エネルギーというのが、もろに出てくる時代に我々は入ったと考えます。自由主義は、要するに弁解のきかない仕組みであろうと思います。誰かが、我々を抑圧したから、こうなったというふうには言えないわけでありまして、そういう意味で、正面から、私がいくつか挙げました諸点について我々もそれなりの答えを出さなければいけないということであると思います。自由主義の思想については、みなさんご存知のように、この十数年特に、正義論とか、あるいは新自由主義とか提起されて参りましたけれども、私は、それだけでは、なお不十分だという感じを持ち続けてまいりました。この段階において、新たな要素を付け加えて考えてみたらどうかということをおもったものですから、いくつかの点について問題提起をさせていただきます。